# 被災地訪問ツアーについて

　聖アンデレ教会では、二〇一二年の夏のプログラムに替えて東日本大震災被災地訪問を実施しました。二〇一一年三月十一日の巨大地震と津波の被災、その後の火災、並びに福島第一原発事故による大量の放射性物質拡散という原子力事故により、多くの方々の命と生活が奪われました。聖アンデレ教会でも震災直後からの食料運搬をはじめ、教会全体で、またグループで、さらに個人的にと、さまざまなチャネルを通しての被災者支援や、日本聖公会被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」のための募金活動やボランティア活動、人員派遣、祈り、また東京へ避難している方々への支援活動など、可能なことを行って参りました。

　一方、東北という広大な地域での被災という状況や東京からのアクセス、また被災地の被害状況などの様々な条件により、実際に被災地に訪れた方はごく限られていました。また震災後二年目を迎えてメディア報道なども減少し、東京と被災地との震災後の関わりの温度差が生じてきたことや現地のニードや支援の在り方の変化、同時に震災後遅々として進まない地域再生計画などへの不安など、時間を経過してきたからこそ生じてきた課題があることを知ることとなりました。

　東北という地域は、震災前から深刻な過疎化や高齢化、少子化、また経済の低迷という課題をすでに負っていた地域です。同時に高度経済成長の中においては安価な労働力提供地域として、また都市の食料供給地としての役割を果たしてきました。しかし東北地方が東北地方として独自の言語や文化を持ち、人の交わりや協力の中で知恵をもって長い冬を乗り切って力強く生活してきたことなどはあまり評価されずに来ました。近代史において、いわゆる「取り残された」、「忘れられた」地域でもありました。そこにこの度の未曾有の出来事が起こったのです。被災地では、再び「忘れられる」ことへの懸念が起きていました。それは、被災地でもある東北教区主教と「いっしょに歩こう！プロジェクト」本部長を兼務されている加藤博道主教様や現地スタッフの方々が、例え短期であっても観光であっても、現地訪問の重要性を何度も呼びかけてくださっていたことと通じることでもありました。そこで、わたしたちは「忘れないこと」を目標に、より身近に東北地方の人びとの息づかいに触れ、また震災後の現実を知るために出かけていくことといたしました。

　この度、六月から十月までの間に六回、延べ四十名の方々が参加してくださいました。参加者の皆様、都度牧師の留守をご了解くださった教会の信徒の皆様、そして加藤博道主教様、「いっしょに歩こう！プロジェクト」副本部長池住圭氏、事務長松村豊氏、仙台オフィスや新地ベースのスタッフの方々、各地で出迎えてくださった皆様の暖かいお心の故に感謝を申し上げます。参加者は、帰京後それぞれの生活の場において東北で経験したこと、見聞きしたこと、感じたことを伝える役目を果たすために過ごしております。今後わたしたちは東北での交わりや経験を忘れることはないでしょう。そしてこれからも継続して祈り、支援の一端を担っていきたいと願っております。

　ここに参加者からいただいた文書を掲載し、ご報告とさせていただきます。尚、巻末には二〇一二年八月に東北教区にて実施された日本聖公会全国青年大会（四年に一度開催）への聖アンデレ教会からの参加者の報告文も掲載しております。併せてお読みいただけますと大変幸いに存じます。

二〇一三年二月


日本聖公会東京教区
聖アンデレ教会
牧師
司祭マリア・グレイス笹森田鶴

## 【第一回ツアー】
## 六月十二日～十四日
## 第一回被災地訪問レポート

三好忠彦

夏のキャンプに替わる試みとして少人数による被災地訪問が企画され初回は試行の形で六月十二日～十四日に実施された。目的は被災地に宿泊しお土産購入といった行為で地元を支援しつつ現状を理解する事と管区の「いっしょに歩こう！プロジェクト」への今後の関わり方を模索する為である。

既に何度も現地入りしている笹森牧師、鈴木茂委員、松村委員に、初めての稲葉さん、鈴木侊子さん、そして私共夫婦の七名が参加。震災から一年三ヶ月後の被災地を訪れての思いを少し述べさせて頂く。

美しいリアス式海岸の風景で有名だった東北三陸の地が、大地震と大津波により無残な姿に変貌してしまった。プロジェクトの車を拝借し鈴木委員の運転で見た光景は想像を遥かに超えた凄まじいものだった。見渡す限り家の基礎部分だけを残して何もない光景が続く。走っても走っても延々と続く惨状に言葉がない。百聞は一見に如かずという諺の意味が分かった気がした。

帰京して宮城県の「震災復興計画」を読ませて貰った。復興までを十年とし（平成三十二年）、最初の三年が復旧期、次の四年が再生期、最後の三年が発展期となっている。もっと長いスパン（三十年以上）を要するのではないかと現地を見て直感した。

ある方が地球にやさしいという言葉は人間のエゴと思い上がり以外の何ものでもない。人間は地球がやさしくしてくれる時だけ生きられるのだと書いていたが、３・１１を経験して至言だと感じた。私達は今回の天災の犠牲者を悼み祈らずにはいられない。

同時に人災である原発事故を含めて風化させてはいけないと思う。いつまでも被災地を覚え続けてゆく事と、皆が「被災地と一緒に歩こう」という姿勢を保ちながら息の長い支援を続けてゆく事が、今求められているのだと思う。

## 被災地訪問

ナオミ　三好憲子

二〇一二年六月半ばにアンデレ教会で募られた東北の被災地訪問に、笹森司祭と信徒が六名参加しました。「いっしょに歩こうプロジェクト」の仙台オフィスを経由して街を抜け、津波の被害地を延々と走りました。風もなく静かで、辺り一面コンクリートの土台だけが家々の間取りを残していました。桜の名所という石巻の日和山公園からは、眼下にぐるりと被災地域が見渡せ、幼稚園バスがここに居たら助かったのにとのことでした。大川小学校や山元町のふじ幼稚園でも、子供たちの命が失われ悔恨を残しています。

陸前高田では市庁舎がそのままの姿で残され、書類や事務機、乗用車までが屋内を埋めた汚泥の中に散乱していました。目立つように壁に書かれた赤い×印は、ご遺体発見時に収容の為につけられたものだそうです。

何もかも失せた広い平地に、形を残さないほど壊れた車が累々と積み上げられ、進まないといわれながら片付け作業のご苦労は相当なものと察せられました。テレビの映像では分からない被害地域の広さと傷の深さが空気の中に迫り、参加者それぞれがどこを見ても途方にくれていました。

アンデレ教会の仲間が早くに現地入りした相馬郡新地町では、磯山聖ヨハネ教会だけが高台に残り、もう使われることのない大正時代の歴史ある聖堂は温かい風格を残し立ち去りがたいものでした。平地の信徒の住宅は壊滅し、教区のキャンプ地「ときわ旅館」も経営者と共に流され、親類の三宅さんが背後からも津波が来たと驚くような説明をなさいました。その地区の広畑仮設住宅と新地ベースでは、スタッフが住人の方と深く関っておられました。集団移転の候補地に関して安全な場所の選択がされても、環境省・文科省など行政での関門を次々通過せねばならず、避難の方全員が安住するまでには、気が遠くなる行程があると伺いました。スタッフがそのような状況におられる方々と共に悩み、近くにいて向き合う姿には

真似の出来ない敬意を感じ、役には立たずとも祈りつつ地域に近い存在でありたいと思いました。

あの日以来、それぞれが地域の危険性を学び始めました。釜石の子供たちは日頃の訓練から自力で助かり、和歌山の子供たちと交流をもち伝授していると聞きました。今回被災された方は、子供も大人も私たちの先生でしょうと思います。常に目を覚ましていなさい、油を切らさないようにしなさいという言葉が、似た響きで浮かびます。

今回は訪ねませんでしたが、福島は放射能汚染で最も痕を引く被害地域でしょう。人為的な事故も国民が重大に考え続けることにより、安心な状態に導いて欲しいと切に祈ります。又、漁業、農業、林業など第一次産業が復興し生活の基盤が戻り、過疎化の問題も同時に解決できるような夢の策があったら、この国を誇りに思います。

亡くなられた方に手向けられた沢山の花や千羽鶴と、痛みを知る多くの人に支えられて様々な問題の解決が良い方向に進みますよう祈ります。この地震で傾き使用不能となった東北教区の主教座聖堂・仙台基督教会の再建が始まることは明るいニュースです。

仙台で出迎え、車を手配し、宿泊の修道院・静修館の貸布団のお世話までして下さった松村ご夫妻、作業所ひまわり、室根のナタナエル教会も案内くださった池住さん、山本君、そして、現地で案内下さった長谷川司祭、林司祭、同行の笹森司祭、運転の鈴木茂さんのお蔭さまで出発前より被災地への理解が進みました。感謝です。

## 「主よ、哀れみ給え」

グレイス　鈴木侊子

このたび「いっしょに歩こう!プロジェクト」の呼びかけに参加させていただき、六月十二日より三日間を、鈴木茂さんの名運転で、仙台から(仙台のけやき通りはすばらしい!)釜石、気仙沼、新地等を見学させていただきました。

震災前は、さぞかしのどかな環境の中で、日々をすごされていたであろう方達が、あの三月十一日の地震と大津波の恐怖を体験されたのにもかかわらず、とても明るく接して下さり、思わず「主を、哀れみ給え!」と心の中で叫んでしまった自分を今でも想い出します。

ただ、このような天災が又いつどこで起きるか解りません。その為にも災難にあった時に何が出来るか、又、してあげられるか、注意深く見守っていきたいと思います。

## 東北に行って

稲葉暁子

二〇一一年三月十一日、午後二時四十二分、東北に地震がおそいかかりました。すぐにTVをつけて地震と共に発生した大津波の恐ろしさに、ただただ、呆然と見ていました。

流された人々は?家は?その他の物は?その時から、自分には何が出来るのか必死で考えました。でも答えが出ませんでした。

その後、教会に行き、現地を見て来られた方々のお話をうかがい、映像を見て、自分も自分の目でその現実を見たい、そして少しでも自分に出来ることがあったら、何かをしたいと思うようになりました。

でもなかなかそのチャンスもなく、悶々とした日々を過ごしている時、六月十二日から三日間、東北に行くチャンスが訪れました。すぐ行く決心をしました。

現地では、行くところ行くところ、ただ息を飲む光景に言葉もなくショックを受けました。大自然の猛

威がＴＶで見ていた光景と重なり、ただただ目を見張るばかりでした。

今もこの寒い冬、仮設に住んでおられる被災された方々に関心を持ち、自分に置き換えて考えている人々がどれ程おられるでしょう。少しずつ忘れられているのではないでしょうか。

現実にはそのような沢山の方々が苦しい思いをしておられるのです。その中でもどうにか立ち直っている力強い方々もおられます。頭が下がります。

国も復興の為にどれだけ心を砕いているのでしょう。被災地の復興と言う言葉が度々出ていましたが、それは選挙の為だけのものではないでしょうか？当選してしまったら復興も被災地の方々のことも忘れて、次なる自分達のことの為に動いているように思えます。どうして自分に置き換えて考えてみることが出来ないのでしょうか。日本の国はこれで良いのでしょうか。人の痛み、苦しみ、もちろん喜びも互いに分かち合える、そういう人々の住む国にならないものでしょうか。

私が今出来ることは、この事実を忘れないこと、いつも祈っていること、少しでも自分が我慢して彼らの気持ちに寄り添うことが出来たらと思っています。

東北に行って、大自然の恐ろしさを身に感じ、ショックと疲れ（心の）とでしばらく立ち直ることが出来ませんでした。これからも出来る限り、この事実を忘れない為にも、引き続き月一回の被災地の為の礼拝に出席したいと思っています。

## 【第二回ツアー】
## 七月二日～三日
## 今おきている現実を見に

**大川俊子**

「被災地に行きたいの。行かない？」
「見物には行きたくないな」
「歴史を見届けてくるの。歴史はこの目で見なくてはダメヨ」

こんな話をしていた数ヵ月後、笹森先生がツアーを計画してくださったので、長谷川洋子さんと一緒に石巻に行った。

被災者をたくさん受け入れた大観荘、雑草が伸び放題の線路。ガレキが取り除かれて、平らになった町。そのすぐそばに山に積まれたガレキ。映像で見たのとは違った光景だった。

復興市場で店の方が、「どこから来たの？」「東京からです。みなさん頑張っていらっしゃる様子で、少し安心しました。」「そういうふうにしていかないとだめだからね。」

重たい現実。私には何もできないけど、この現実を忘れることはないだろう。行ってよかった。今、おきている現実を見なければいけない。その大切さを知りました。この企画に感謝です。

## 【第三回ツアー】
## 七月九日～十二日
## 第三回被災地ツアー報告

**村田信子**

私はボランティアが目的の第三回被災地ツアーに参加致しました。

池袋を夜行バスで出発、七月九日午前八時過ぎに釜石被災者支援センターに到着しました。センターの二階がボランティアの施設となっており、他教区の方々と共に自炊の共同生活。朝の祈りの後に朝食をとり、海老原センター長からオリエンテーションを受け、四日間のスタートとなりました。

初日はセンターの宿泊者用寝具の整頓、支援物資（衣類）の整理を行い、午後から海老原さんの案内で被災地の視察に出かけました。

センター近辺（鈴子町）の釜石湾から幾つかの湾を通り、大槌町の村役場まで行きました。入り組んだ湾は被害が奥まで及び、手付かずのところもまだ多くありました。海辺のかつて町の賑やかな通りだったところも、今は全てが無くなり、纏められた瓦礫の山がむなしく点在している光景が延々と続いていました。復興には本当に多くの年月とそれを支える多くの力が必要なことを痛感致しました。大槌町の役場は当時のままで残されており、一瞬のうちに多くの生活、命が奪われた状況が生々しく感じられ、大きな衝撃を受けると共にお一人お一人のために祈らずにはいられませんでした。帰りには神愛幼児学園（神愛教会）に立ち寄りました。心に傷を残している子供もいると伺いましたが、子供の方から声を掛けてくれたり、屈託のない笑顔に一日の緊張がほぐれる思いでした。

　二日目はセンターから一番遠い栗林町の仮設住宅に、座布団（大館の聖パウロ教会制作）の無料配布の注文を取りにゆく作業を一日掛けて行いました。座布団配布を一つのツールに、被災者の方々と関係を深めるのが目的で行われました。殆どのお宅は働きに出ている時間帯で留守が多く、お年寄りの方と何人かお話しすることができました。皆さん被災したことには触れず、仮設生活にけっして満足なさっている訳ではないと思いますが、私達にもとても好意的に接してくださいました。仮設入居者相互の思いやりがあり、花壇を作ったり、前向きに今の生活に取り組んでいらして、復興に向かっての大きな力を感じました。午後にもう一度留守のお宅を訪ねましたが、顔見知りになった方々がご協力くださり、百枚を超える注文を頂くことができました。仮設で暮らしながら生活の為に働きに出ている方々は、殆どが仕事につけてはいるものの、決して良い条件の元で働いている訳ではなく、人が嫌がる仕事を多くの方がしているのが現実だそうです。

　三日目は小漁村視察。センターから車で三陸特有の海岸線を約一時間。大石漁港の西野さんをお訪ね致しました。途中の海は何事も無かったように本当に美しく、周りの緑も豊かで、自然の再生力の素晴らしさに励まされる思いがしました。西野さんは漁が天職で、日夜試行錯誤を繰り返し、独自の漁法を打ち立て、日に四十万円の水揚げがあることもある大石漁港きってのベテラン漁師です。大津波は船、筏、漁場、加工場すべてを奪ってしまいました。おまけにまったくの個人に対しては行政から何の保証もなく、収穫まで三年かかる物もある中で、再開するめどが立たないままになっているそうです。漁港で協同組合を作り、保障を受けることも考えましたが、考え方や技術が違い、おまけに大切に積み上げてきた言わば企業秘密を提供することはできず、断念なさったそうです。失ったものはこれだけではなく、昔から地域で大切にしてきた「虎舞い」の道具も衣装も全て流されてしまい、お祭りができない状況となってしまいました。奇跡的に虎の頭部分だけを拾い上げることができたそうで、その場に置いてあった口が動くのがご自慢の虎の頭を持って、私たちの前で楽しそうに踊ってくださいました。仕事、楽しみすべてを失った西野さんにどう寄り添えばよいのか、本当に心苦しい思いでいっぱいでした。そしてセンターからこんなに遠く離れた大石の小漁村に、西野さんのような方を見つけ、信頼を築き、支援を続けている釜石被災者支援センタースタッフに大きな感謝を覚えました。

　帰り際に、寒くなる十一月に何か（わかめ？）の収穫があることを西野さんは口にされ、新しい一歩を踏み出されていると確信いたしました。

　この日午後には、神愛教会（神愛幼児学園）が老朽化のため間もなく立て直しをするので、聖別解除式が行われ、私達も参加するお恵を頂きました。

　四日目は上中島の仮設にお二人の被災者をお訪ねし、お話しを伺いました。

　空き時間にはセンター業務をお手伝いし、おいでになった被災者の方々にコーヒーをお出ししてお話しを伺いました。まだ現在の不安ごとの中に留まっている方もおいでですが、多くの方は今、何かやりたい、作りたい（料理、洋裁、編み物 etc）という意欲を持っておられ、

受け身の生活を越え、自発的な前向きの生活が生まれて来ているように思いました。

　四日間の触れ合いの中で、被災当初は皆が同じように悲しみ、困窮していたものが、時間の経過とともに支援の格差も含め、それぞれに状況の変化が起こり、解決しなくてはならない問題も多様化している現実を深く感じました。そのような中で弱いものが取り残されないようなきめ細かな支援が必要と思いました。

　このツアーに参加できましたことは本当に大きなお恵でした。被災地の方々のお顔が今でも浮かびます。東京の地でも何かの形でいっしよに歩んでいきたいと思います。最後になりましたが市民権も得られ、日夜お働き下っているセンター長はじめ、聖職、スタッフの皆様に心より感謝いたします。

## 二〇一二年夏　被災地訪問

松村信子

　一年ぶりで支援センターのお手伝いとして、釜石に行かせて頂きました。昨年七月に訪れた釜石は、津波の爪痕が生々しく残る町並みで、現在支援センターになっている建物も、水をかぶり汚れたままの状態でした。一年たった町の中心部は、建て替えも進み、新しい道路も造られていました。しかし中心部を外れると、瓦礫は撤去されたものの何も手つかずの、人ひとりいない更地がどこまでも広がっています。一方、撤去された瓦礫は、町はずれにいくつもの山を築き、いつ片付くのか見当もつきません。

　私達がお手伝いした支援センターの仕事は、センター内の整理整頓、センターにいらした方々との語らい、そして仮設住宅の訪問で、物資配布という形で一戸一戸声掛けをしたり、いくつかのお宅におじゃまして、ゆっくりお話を伺ったりしました。

　センターにいらっしゃる方は常連さんも多く、短期間滞在の私達でも、二回三回と繰り返し顔を合わせていくうちに、会話も弾み、いろいろな体験を聞かせて頂くこともありました。おじゃました仮設では、被災した時の強い衝撃のためか、同じ話を何度も何度も繰り返し話さずにはいられないという方がいらしたり、同じ仮設の中で、他の人達の妬みや猜疑心に悩ませられているというお話をされる方もいらっしゃいました。仮設住宅に暮らしながら、落ち着きなく毎日を送っている様子をあらためて感じさせられました。

　それでも、支援センターを訪れて下さる方々や、仮設でのプログラムに積極的に参加して下さる方々は、お互いに顔を合わせ、繋がりを持って生活していらっしゃいます。今日も元気でいることを確認しあえる人間関係を持っている方々は、なんとか日常生活を取り戻しつつあるように思います。その他にも、仕事を始め家を確保して、前へ前へと進んでいる方もいます。反面、この一年、何も変われずにいる方も大勢います。どの様な声掛けにも家から出てこられない方、精神的にも、金銭的にも困窮して、追い詰められている方など、とても心配な状況も広がっています。

　被災した町の中に、新しい家や道が造られている所、更地のままの所、破壊された建物がそのまま残されている所と、さまざまな状態が混ざっている様に、同じ被災者という方々の中にも、この一年で、大きな違いができていることを実感します。そしてこの様な状況は、被災地のすべての地域に言えることだと思います。

　一向に進まない復興事業や国の支援策に、もどかしさを感じずにはいられません。早くしなければ、取り残され孤立していく人がどんどん増えていきます。この様に複雑に変化していく被災地の現実を前に、支援の形もどんどん難しくなっているように思います。

　今自分に何ができるのか考えた時、まずは、被災地に立つ機会を与えられた私達が、一人でも多くの人に、この体験を語り続けること、被災地を忘れてはいけないと訴え続けること。小さなあたり前のことですが、語り続けることが息の長い支援に繋がってくれると信じたいと思います。

## 釜石報告

菅原　悠

私は七月八～十二日の日程で、釜石～池袋間の深夜の高速バスを使い、実質二泊五日の釜石訪問をしました。釜石に滞在した三日間では、まずセンター長の海老原さんの案内による現地視察を行い、それから釜石センター内の整理をしました。センターは一階が談話スペース、二階がスタッフの寝泊まりスペースで、この両フロアの荷物整理を行いました。さらに市内の神愛教会と併設の神愛幼児学園や、市内に点在している仮設住宅のうちの一つへも訪問しました。仮設訪問では、秋田の教会の有志の方から贈られる手作りの座布団を、希望する住人の方に配布する活動として、住宅を一軒一軒回り注文を聞きながらお話ししました。最後に釜石の市内から離れた小さな漁村へも、そこは震災直後から聖公会が様々な支援を継続していることから、漁師の中のリーダー格の方を訪ね、お話をしました。

この経験からもう数ヶ月以上たちますが、釜石に行く前と今の自分の心を比較し、二つ気づいたことがあります。

一つ目ですが、私たちのボランティアは短期間の場合が多く、そうなると気持ちが盛り上がりがちになります。しかし大切なのは、普段と同じ心の状態を保つことだということです。例えば三～四日間もあれば皆さんは旅行に行かれるでしょう。旅行に行くときは心がわくわくして、普段よりも興奮するものです。しかし、センターの活動は現地に住んでおられる方と接することなので、そのときに私たちが旅行者気分でいては心の釣り合いが取れません。ですから、私たちの側も普段と同じリズムで行動する。これが一つ目の大切なことだと思います。

二つ目として、今度は逆に様々なことに興味を持とうと思いました。というのは、好奇心を広く持つことで、私たちは色々なメッセージを受けられると実感したからです。津波の影響を受けたエリアは、今でも人が住めない状態の建物が残っていたり、あるいは建物が解体され更地になっていたり、または既に新しい家が建っていたりと、モザイク状でした。この状況から、街の復興というのは一様ではないという現実を痛感しました。一方、釜石市内の川の木々の不変の姿から、時間がかかっても復興は実現することを確信しました。このように自分の心に響きやすいテーマに対して常にアンテナを張り、好奇心を持ち続けることが大事ではないでしょうか。

以上二つのことの継続は、一人一人が被災地と繋がっているために大切なことです。私も普段から心の平静を保ち、いろいろなことに耳を傾ける心がけだけは続けていこうと思います。例えば、釜石ではどのような活動をしているのか、「いっしょに歩こう！プロジェクト」は今どうなっているのかを、報告会や印刷物等を通して知り、いずれ訪れる個人レベルでの関わりあいの準備とすることを、私の経験からお勧めします。

## 釜石のボランティアに参加して

郷司幸子

大震災から一年四か月たった今年の七月初旬に二泊三日で釜石のボランティアに参加しました。釜石の被災者支援センターに寝泊まりして被災地の爪痕を見て回ったり、仮設住宅を訪問したり、海辺の漁村であわびやわかめの養殖を共同でおこなっておられるリーダーの方の話を聞いたりしました。

被災地の様子は一年半近くたった現在ではもう被災当時の生々しさはないものの、十分に津波のすさまじさを物語るものが至る所にあり、今までテレビで見てはいたものの、実際に現場で見た衝撃はテレビとは比べ物にならないほど大きいものでした。特に大槌町はほとんど壊滅状態で、かつ家屋が建っていた所には基盤となる石だけが夏草の中に残っている景色がどこまでも広がっていました。建物が残っていたとしても廃墟化していて、中には×印が書かれているところが数か所あり、それはそこで遺体が見つかったところだと聞いて、阿鼻叫喚

の中で命を失った方々の苦しみや恐れ、無念さを思い厳粛な気持ちになりました。鉄道線路、コンクリートの防波堤、鉄橋なども巨大な力で寸断され、抉られ、曲げられ、破壊のすごさに言葉も出ませんでした。津波でつぶされた車の集積所ではどんな力が加わればこんなにスクラップ同然になるのかと、想像を絶する津波の水の力の脅威を窺うことができました。石炭のボタ山のようにうず高く積まれた瓦礫の山の処理、海岸の地盤沈下を防ぐ補強工事、津波でやられた建物の解体などざっと見ただけでも復興に向けての作業は山とあるのに、なかなか作業は捗っていないと聞きました。

　釜石から車で三十分ほどのところにある大石という漁村へも行きましたが、途中車窓から見る海の景色は穏やかでリアス式海岸の眺めはとてもきれいでした。しかし周りを見回すと山の中腹には海水をかぶったため茶色になって枯れかけた杉の木があり、海岸近くでは頭上の電線に丸い大きな浮きなどがぶら下がっていたりして、この穏やかで静かな海がひとたび牙をむいた時の恐ろしい痕跡が見られました。大石ではわかめやアワビの養殖をやっている西野さんという方の話を聞きましたが、津波で養殖がすべてダメになった当座は精神的に落ち込んでしまってやる気もなくしてしまったが、時間がたつにつれ、やはり自分は海が好きで海から離れて暮らせない、だからもう一度やってみようと思うようになり、大石の漁師さんたちと共同でわかめやアワビの養殖を再び始めたということでした。やさしい眼差しの穏やかな感じのする西野さんでしたが、ここに来るまでにはさまざまな苦しみや迷い、葛藤などがあったのだろうと思います。今は地元の漁師さんたちの共同作業のリーダーとしてやっておられますが、共同と言ってもいろいろ問題もあるということでした。でも海が大好きだという西野さんは、今後も地元の漁業発展のためにリーダーとして思慮深く、みんなを束ねてやって試行錯誤をしながらやっていかれると信じます。

　釜石から車で三十分ほどの奥まったところの栗林というところにある仮設住宅を訪問しました。ここは釜石から一番遠い仮設住宅という事もあって訪問する人も少ないそうです。そこで私たちは座布団の注文を取るという形で、仮設の方々と触れ合うことができました。

　各戸の家の前には野菜や花の鉢植えが置かれていましたが、これによって少しでも心をいやしておられるのだろうと思うと、なんだか心が痛みました。ある女性は震災以降、息子さんが精神的に変調を来たし、仕事に行こうと車を運転しようと思っても震えが来てハンドルも握れない、同じ仮設の別のうちに住んでいるが、そこからお母さんの住宅までの数歩の間もまっすぐ歩けない状態だと言っておられました。このお母さんは話している限りでは非常に明るく振舞っておられ、積極的にいろいろ話をしてくださいました。率先して仮設住宅の土手に花を植え花壇を作り始めたら、それを見て有志の方々も参加するようになり今は季節の花が咲き乱れていました。水やりにも工夫をして、土手の下を流れる小さい水路に田んぼで水溜めに使う板を利用して水を溜めて、花に水をやっているという事でした。

　困難な生活の中でもお互いに協力して、工夫して少しでも生活に明るさを取り戻そうとしておられるのが印象的でした。皆さんは訪問した私たちに親切に接してくださり、「ここの家は今仕事に行っているから、留守だけど家族は～人だから座布団もその数だけ」「あそこは今だれも住んでいない」と外に出てきて、案内してくださったりしました。皆被災し、同じ境遇の人たちが仮設に住まい、非常に不便な生活を強いられながらも、助け合い、話せる人がすぐ近くにい、談話室に集まっていろいろなことをやり、みんながお互いに見守っているあり方は仮設のいい所だと思いました。しかし、仮設住宅の居住には期限がありますが、果たして期限までに出ていけるのだろうか、ひょっとするとずっと出ていけないのではないか、この方たちが元の生活を取り戻せるのはいつのことになるのかと思うと、正直言って暗澹たる思いになります。住居や物質面だけでなく精神面の打撃で立ち直れない方々も多くおられます。

　釜石の被災者支援センターには

毎日被災された方が訪れ、お茶を飲みながら、センターの方と話をしたり、支援物資を手に入れたりしておられます。センター長の海老原さんに聞いた話によりますとそこを訪れる方々にとって、そこは心のオアシスになっているようで、「ここへ来ると時間のたつのを忘れてしまう」「ここで話をするのが何より楽しい」と言っておられるようです。被災された方にとってそういう場所が提供されるのは、とても大切なことだと思います。何より自分は一人ではない、あそこに行けば誰かと話ができる、それは心の大きいよりどころです。私が行った時も何人かの初老の女性たちが来て、お茶を飲みながら、三一教会から来られていた八幡さんと楽しそうに時には大声で笑ったりして、心を開いて話しておられました。八幡さんや海老原さんとの屈託のない交流の仕方を拝見していて、このような関係を作り上げることが被災された方にとってどんなに慰めになり、支えになることかと感じました。その意味でも支援センターの存在は大きな役割を果たしていると思います。

今回の釜石訪問を通じて、感じるところが多くありましたが、何より被災された方々に常に寄り添うことの大切さ、言葉で言えばきれいごとですが、ではそれをどんな形で行動に移せばいいのか、自分には何ができるか、自分にできる範囲でどんな小さいことでもいいからやらなければと思います。

寒くなってくると仮設住宅の方はどうしておられるか、暖房器は備えられているのか、心の傷は多少癒えて又、仕事に戻られただろうかといろいろ思います。自然災害は抗いようがなく、だれの責任でもありません。(原発はそうでない)しかしその後の支援や対策は人間がやらなければならないことです。それが遅々として進まず、対応も遅く、復興予算など省庁が被災地に直接結びつかないものに回されていると聞くと、怒りと共にそういうことが平気でできる省庁や政府関係機関に情けなさをとても強く感じます。一日も早く被災者の方々が元の生活に少しでも近づける環境づくりが実現されることを強く願います。(二〇一二年十二月)

## 【第四回ツアー】八月二日～四日

## 被災地訪問

**杉山晴比古・和子**

私たち夫婦は笹森司祭・鈴木茂兄引率のもと、八月二日(木)～四日(土)の二泊三日の日程で被災地を訪問いたしました。

私たちの訪問目的は、小生の勤務先が災害拠点病院であり、被災直後から被災地に対する医療支援の対応を執っていたこと、小生は留守番部隊として職場に残らなければならなかったこと。時間は経っていましたが、また被災地訪問は気が重い思いはありますが、自分自身で被災地の状況を確認したいとの思いがあり、参加を希望いたしました。

職場での支援体制は、行政からの支援要請に基づき、震災直後から当初D-MAT隊(緊急医療援助隊)の派遣、続いて医療救護班(医師、看護師、事務職員の三名体制)の派遣を六月末まで交替で行いました。

派遣当初は現地の治安状況が必ずしも安全ではないこと、夜間は真っ暗であること、女医・看護師の単独行動、特にトイレは必ず男性職員の付き添いで複数行動、「がれき」には釘を踏む可能性があるため、足を踏み込まない等の指示が出されておりました。

特に、震災直後は東京から医薬品・医療材料は当然のことながら、個人が使用する保存食品とか飲料水は現地調達ではなく、東京から持参するよう指示されておりました。

また今回の被災地訪問でもお話しがありましたが、皆でピースサインを出して写真撮影等は禁止されておりました。

職場での派遣目的は救急処置・応急治療など外科的な処置ではなく、医療機関崩壊による対応として、地元医師会とか避難支援ボランティアの方々と協働しながら、避難所または自宅に居る被災者の方々が罹患されている高血圧症とか糖尿病等の内科系基礎疾患に対するフォローアップとか、長期臥床に伴う褥創処置、ガレキ処理に伴う粉塵対応の呼

吸器系疾患、少し落ち着いてからは不眠とかうつ状態等精神科的ケアを行うための巡回診療でした。

帰院した派遣職員のお話しから、現地の腐敗臭を含む惨憺たる状況をお聞きし、私たち夫婦は自分自身の目で確認したかったことが、今回の被災地訪問の目的でした。

参加者は倉辻ご夫妻、黒瀬兄、斉藤美代子姉、牧野兄と我々で、引率者を含めて九名でした。

第一日目の二日(木)は管区「いっしょに歩こう!プロジェクト」の仙台オフィスで被災状況とプロジェクトの活動報告等概略の説明を受け、被災地図にある東北地方海岸線の広大な地域が被災されたことが理解出来ました。

その後東松島、石巻の高台にある「ひより公園」で被災地を拝見しました。

移動車中、鈴木茂兄より、被災直後からの状況をお聞きしながら現地を訪問いたしました。

その夜は気仙沼プラザホテルに宿泊しました。

気仙沼の港は岸壁が海水面に近いことから、港の地盤が震災で沈下していることが解りました。

台風シーズンを迎えるにあたり、どの様な備えが必要なのか・・・

第二日目の三日(金)は朝から被災地巡りとして、気仙沼市内から陸前高田を訪問いたしました。

訪問先は、ガレキが撤去された跡、何にもない一面ベタ基礎のみ残っている住宅街跡地、鉄骨剥き出しのRC構造の建物群のみでした。

その後、室蘭聖ナタナエル教会経由で仙台へ向かいました。

夕食は仙台オフィスで奉仕されていらっしゃる聖アンデレ教会信徒の村松兄を含めたボランティアの方々と情報交換が出来ました。

被災と仮設住宅での非日常生活が、日常生活になっている旨、また東北は農政のアンバランスにより、昔、飢饉時の身売り等、また現在も震災・原発で苦労しているとのご説明が、強く印象が残りました。

その夜は、仙台聖フランシス教会隣接の青葉静修館に宿泊いたしました。

青葉静修館は木造二階建て一部地下室の古い建物で、笹森先生も学生時代其処で勉強されたとのことでした。建物は古いが、中々趣のある建物でした。

大韓聖公会の訪問団の方々も同宿でしたが、特に交流はなく、挨拶程度でした。

翌日は福島県の新地へ移動いたしました。

磯山聖ヨハネ教会の周辺は海岸線に近く、海岸線と教会の間に防波堤と線路が在りましたが、津波により破壊され、聖ヨハネ教会信徒の方が経営されていた「ときわ荘」跡地では、風呂のバスタブのみが残っていたことが印象的でした。幸いにして難を逃れた方の苦悩は・・・

今回訪問させて戴いた其々の場所で、被災された方々が、想像も出来ないような地震・津波の災害を受けた時の想像も出来ない思いが感じられました。

特に大川小学校での、多分被災前には休み時間に大声を出しながら子供達が遊びまわり、走り回っていたであろう校庭が、子供の声が聞こえず、何の音も無く、ただただ風が吹きすさぶ音だけが聞こえていました。

校舎を前に山へ逃げれば良かったのにとか、何で早く避難が出来なかったのかなど、また、被災された「ふじ幼稚園」を訪問した時、水に浸かって寒さを堪えながら園児を護りながら亡くなった先生のお話し、園庭で遊んでいただろう幼稚園の園児達が、現在は幼稚園の花壇の中で小さなお地蔵様になって、天気が良い時は外に出て太陽を浴びる等の説明をお聞きする度に、私たちの孫達の遊ぶ姿がオーバーラップし、今も胸が痛くなる思いです。

現地ボランティアの方から、マスコミに報道されないこと、即ち、被災直後に他県ナンバーの車が入り込み、ご遺体から指輪とか財布等の金品を略奪する。指輪が抜けなければ指を切断して指輪だけを略取する。財布を略奪することは仕方がないとしても、略奪した中身を抜いた財布をその辺に放り出すことによって、ご遺体は身元不明になってしまうことなどのお話しもお聞きしました。

何と言うひどいことを・・・

仮設住宅では、大韓聖公会の訪問団の方々が、昼の暑い中ボランティアとして椅子等のペンキ塗りのご奉仕されていましたが、被災住宅の方々はただ眺めているだけでした。

第三日目の四日(土)は東北道を南下致しました。笹森先生から「高く盛り上がった高速道路の海側は海水の浸食があり、遠目に見る青く盛る畑は雑草であり、海岸線から高速道路を挟んだ山側の畑は手入れが行き届いた作物が植えられている」との説明をお聞きし、同じ被災県での天国と地獄を感じました。

帰宅後、我が家の夏休みの計画を和子と話し合いました。

その結果、会議のない八月中旬に夏休みを戴き、私たち夫婦は自家用車で東北の温泉地巡りをすることにしました。

とは言っても直前でしたので、宿の予約は取れませんでした。

そのため、事前に予約をせず、行き当たりばったりで安い民宿に飛び込みで入り、その民宿を基地に周辺を拝見すると言うものです。

目的地は八幡平です。たまたま入りこむことが出来た民宿がありました。

その民宿は、被災者の方々の仮設住宅完成までの避難先でもあった訳ですが、民宿の女将さんから被災地から訪れた被災者の方々の温泉地での言動、また同宿の方が仙台在住の建築業で、仮設住宅の最終仕上げを安い料金で請け負い、短期間に大量に仕上げなければならなかったこと。宿泊施設のない被災現地に車中泊まり込みで朝早くから夜遅くまで連日懸命に働いたこと。

そのため、その職人さんのご家族は家庭不和となり、家庭崩壊したことなどをお聞きし、今回の大震災が被災地の方々のみではなく、真面目に働く被災者の方々以外にも、累が及んでいることを知りました。

数ヶ月前、NHKの報道番組で報道されました被災地に直接関係のない復興予算の使われ方を拝見するにつれ、被災地の復興再建は前途多難な感じがいたします。

多分、今後数年或いは十数年かかるであろう被災地の復興は、首都直下型地震の可能性がある私たちの地域と聖アンデレ教会の明日なのかも知れません。

今回の被災地訪問は、言葉で聞いた「被災」と謂う単語と、現実の途方もない被害を蒙った被災地と被災された方々の生活を自分なりに結び付けられ、実感として感じることが出来ました。

今回の我々の被災地訪問の目的は、笹森先生・鈴木茂兄他皆様のお陰で達成出来ました。

笹森先生ご多忙の中、今回の被災地訪問をご計画戴き、本当に有難うございました。

また、鈴木茂兄にも感謝申し上げます。

(二〇一二年十一月十四日)

## 北の地を訪れて

倉辻明男

数年前に訪れた筈のその町は、私の記憶の中にある景色とは全く違っていた。テレビ報道や新聞などでの映像や画像では見知っていたが実際に目の前にすると津波の破壊力が想像をはるかに超えるものであったことを実感できる。もし、地震が起きたのが数年前のあの時だったら、ここを訪れていた自分たちはどうなっていたのだろう。考えただけでも「恐ろしさ」がこみあげてきた。

そんなことを考えながらの北の地の旅の中で、被災地の方々の強さを見たのは、ある広場でテント張りの店を開いていた和菓子屋さん。(とってもおいしい大福でした。)水産品の土産物売り場のおばさんたち。高台に引っ越したレストラン(ドリアがおいしかった。)ブドウ園の造っている無果汁のサイダー(昔懐かしい味でした。)取りあえず、仕事を始めたこのような方々を応援していくのが僕たちのすることかなと思いました。力仕事ができるわけでもなく、長く滞在して支えてあげることができるわけでもないが、少しは後押しできるかなと思う。

今、東京で日常的な生活を送っている僕たちのすることが見えてきた二泊三日の旅でした。

## 「マボロシなき民は滅びる」

**牧野兼三**

二〇一二年夏、陸前高田にて、避難された三百人が亡くなられた体育館を訪ねました。

廃墟の中、ある娘さんが津波で流されたお母様にあてたメーセージを読ませて頂きました。

陸前高田市にて（牧野兼三撮影）

おそらく彼女は、一年半をかけて、ようやく母にサヨナラが言え、未来に向けて顔を上げることができたのだと思います。

悲しみが薄れることはないけれど、人はやはり前を向いて生きなくてはならない。

被災地では、緊急生命救助から次の新たなフェーズに向けて人々はまた少しずつ歩き始めています。

今回の被災地訪問では、色々な場所で多くのことをうかがいました。

「復興って言うけど、一体どこに戻るのよ？私たち東北は、元々過疎が進んで、『興』なんて状態ではなかったよ。」

「誰が呼んだか知らないけれど、この東北の地は、いつの時代でも日本の辺境でした。いつも中央に振り回され、踊らされてきた。」

「景気がよければ出稼ぎで人を駆り出され、結果、家族は離散した、米作りで儲けましょうと言われ頑張ってみたけれど、結果は余剰米、今は借金だけが残っている」

「挙句に魔法のエネルギーだ、雇用創出だと中央のために原発を推進し、爆発事故で故郷を追われている。」

「今、被災地の人々が目指しているのは、復興ではなく、地域の再創造、それはもう二度と中央に頼らなくていい新しい社会つくりです。」

「地域の再創造」それはもしかしたら、実現不可能な夢物語なのかもしれない。そんなこと本当にできるんだろうか？

そんな迷いに対し、笹森先生のお話が印象に残っています。

私たちは、どんなに虐げられても、それが難しいとわかっていても、今こそそのマボロシを追いかけなくてはいけない。

なぜなら、「幻なき民は滅びる」（箴言二十九章十八節）からです。

## 自分のできることを！

**倉辻明子**

仙台に住む学生時代の親しい友人を訪ねて年に一回程度は東北の温泉の温泉に行ったり、世界遺産を訪れていました。しかし、震災後は報道される映像を見ているばかりで今回初めて自分の目で東北の現実を見ることができました。復興とは程遠く一年五か月たっても瓦礫の山がまだまだあり石巻、気仙沼、南三陸町と報道されている悲劇の現場の建物がそのまま残されていました。

一人一人の生活が一瞬のうちに全て失われ二度と戻らないと思うと涙が止まれませんでした。この光景は一生忘れる事の出来ないものです。これから自分にできることを少しずつでもしていきたいと強く思っています。

## 被災地訪問

**斉藤美代子**

あの大震災・津波の被災地への訪問、ボランティアでなくただ行くだけ、そんな事をしていいのか、被災者の気持ちを逆なでしないか、笹森先生に伺ったところ「大丈夫です。見てみること、知ること、そして先方で多少お金を使うことも意義があるのです」という明快なお返事、そして長谷川洋子さんが病をおして訪問をなさり「歴史は見ることよ」の言葉に背中を推され参加しました。

仙台から石巻を経て気仙沼へ。その途中のリアス式海岸の素晴らしさ、湾は何事もなかったような穏やかさ、若布が全滅したのはここですよと言われなければ分からないことでした。気仙沼に入り建物があるので、つい「この辺りは大丈夫だったのかしら」と呟いた途端「中をご覧なさい、空っぽですよ」その様な光景が延々と続く後、気仙沼の漁船が道路すれすれの海面に着いており、こんな間近に、と首を傾げていたところ、地盤沈下でこんなスレスレになっているのです。小さめの船しか就けないと言われ、活字での知識がいかにいい加減だったことかと思い知らされました。

陸前高田では健気な一本松を見上げ、地元で働きをしておられるNPO陸前高田市支援連絡協議会aid TAKATAの事務所責任者である菅野さんのご案内で、まだそのままの旧市役所、公民館を申し訳ないですが取り壊される前に訪れる事が出来、現実を目の当たりにし、どんなに苦しかったかと息を呑む思いでした。

最後の、新地への訪問。幼稚園、新地の海、教会、何もなかったら海水浴の人たちで賑やかであろう海辺は誰もいないさびしい砂浜。何回も来ておられた笹森先生、そしてご存知の方も亡くなりどんな思いでいらっしゃるか私たちはただ今の状態しかわからなく前の事は想像の域のみです。磯山の教会も訪ねる事が出来、松村豊さんが熱っぽく語られた事が成程とやっと理解出来ました。ただ教会を直したところでこられる方がいないのではないかという現実には、言葉もありませんでした。

長い車での走行の間、二度ほどユウモラスに「はい、一時停止。踏切です」。「えっ」と言う思いで窓から見ると曲がりくねった線路があり、なんと鉄道の通っていたところ。でもあたり一面は野原。かつての生活の場は感じられません。どこもかしこも津波の距離は活字と耳とでは分からないことでした。真夏の三日間も暑さを感じない日々でした。

震災直後から何回も現地入りしておられた鈴木茂さんの案内あっての実りある旅でした。どこもあまり人は見かけませんでした。きっと奥のほうへ住まいを替えられているのでしょう。ただプレハブでお土産を売っている方々の明るい表情に救われる思いでした。

菅野さんの「忘れないでほしい」と言うのが私たちの気持ちです。その言葉の様に「何か力になれる事があればしなければ」の思いです。

## 見ると聞くとの

黒瀬晶郎

夏のキャンプに替わって催された、東北地方の被災地見舞いの旅に参加した。3・11から一年有余。あのとき日本橋駅で地震に遭い一晩の足止めにあって、アンデレ教会に転がりこんだ小生として、報道ベースにしても東北の惨状と復興の歩みに関心を持たざるを得ない。

足早に現地を見せていただいた福島県新地町、宮城県石巻、気仙沼、岩手県陸前高田市を含む東北の太平洋岸の五百㎞超もの海岸線が全て1．5～2mほどの土地の陥没に遭遇していることを改めて認識することになった。この事実は報道されない事ではなかった。しかし、「宅地は高台移転ないし土地の嵩上げをもって対処する方向」など矮小化して理解をすることに流されていた。

即ち、新地町の高みに立地する磯山聖ヨハネ教会から一望できる広大な田の面、本来なら秋毎に黄金の穂波が照り映える絶景が望まれる筈なのに、地震以来元々低湿地だった広大な干拓田圃は全て津波の潮をかぶり、海抜も大きくマイナスとなった為、排水・除塩もままならず、後継者も居らぬゆえ野草に任せるほかにないと言う。

土地陥没の被害はあらゆる様相をもって立ちはだかると思われるが、漁港の気仙沼でも、町中に随所にみられる廃墟となった商店、水産会社の倉庫等が立ち並ぶなか、かき集めた漁船で漁に出て、元気よく水揚げに励む姿も見られるものの、時あたかも大潮の時期だったもので岸壁と海水面の差は二十㎝もあったろうか。高潮でも来れば埠頭も街も水浸しであろう。

陸前高田では、NPO陸前高田

市支援連絡協議会の幹部に市役所、市民会館、体育館、一本松等の主要被災施設を案内してもらった。世界に勇名を馳せた一本松は、地元の揺れ動く意見の象徴のようであった。即ち、勇ましくも生き残ったかに見えるこの一本松も、塩害激しく既に枯死していること。津波に耐えて世界に名を成したこの松を何とか処理して残したいという意見もあれば、必要を認めない意見。更には、この地には江戸時代から植栽され、白砂青松を誇った高田松原という七万本の防潮林が有名であったので、復活させたいという意見に、あの血の色に染まった津波で凶器となった松の幹・枝が御遺体を損じた悔しさは孫子には味あわせたくないと云う意見。

それにしても、この大災害は言葉にならない。この旅の初めに仙台のプロジェクトオフィスで加藤主教が「一言で復興という言葉は口にし難い」とおっしゃった言葉が、ようやく腑に落ちたような気がする。つまり、この地域の人々は単純に旧に復する事が出来ない。まったく新しい状況の中で、それぞれに新たな人生を切り拓くように迫られている。

そのような訳で、二泊三日の見聞は将に「見ると聞くとの大違い」だった。

**【第五回ツアー】**
**九月十日〜十二日**

## 一人一人がもっと被災地と

**日比野容子**

被災地へは、九月十〜十二日に訪問させていただきました。

テレビ報道とは違い、実際に見ていくうちに、本当に自然には全くかなわないことを痛感しました。

石巻の大川小学校の校庭に立った時には「神様はなぜ?」と繰り返してしまいました。

行けども、行けども、地盤沈下、がれき、廃屋が続き、完全に破壊されてぶらさがっている線路など、これが現実とは思えない光景でした。

そして、ポツポツと仮設住宅がありました。復興はまだまだこれからです。

仙台を発つ日の早朝、お礼拝のあとで、御世話になった仙台聖フランシス教会の景山博美司祭から「きのうご遺体の一部がみつかったので、きょうこれからお祈りに行くのです」ということを伺いました。

ああ、まだ被災の状況が続いているのだと思いました。

私たち一人一人がもっともっと被災地と向き合っていかなければならないという思いでした。

## 「来ないとわからないよ」

**青木信子**

陸前高田でバスを降りた時、初めに私の眼に映ったのは、広々とした青空でした。これはテレビなどで思っていたものの想像を、遥かに超えた光景でした。他に何も目に映るものはなく、見わたす限りの空き地でした。

ガレキがすっかり片付けられた空き地には草が生え、震災から一年半の時が流れたことを感じました。

はるか彼方に津波の被害を受けた建物の残骸があることに気付きましたが、その壊れた建物には千羽鶴と生花が沢山飾られた祭壇が出来ていました。私にはガレキとしか見えない建物が、ここで生活をされてこられた方々には日々の“思い”がこもった大切な場所だったことを知りました。

数台の乗用車を下敷きにして山側に押し上げられた巨大な漁船が・・・改めて自然の力の大きさ、怖さを思い知らされました。

福島県の新地では、家と一緒に流され荒れ狂う濁流の中で、木片にしがみつき、幸いにもご無事だった信徒さんのご夫婦に、当時の生々しいお話を伺いました。その裏山の阿弥陀堂のような木造の古い古い教会で、参加者全員で聖歌を歌い、この度の大震災で亡くなられた多くの方々に鎮魂の祈りをささげました。

気仙沼では、すっかり流された漁港、加工場の復興がようやく進み始め、海産物店が立ち上がっていましたので、せめてもの思いで買い物をさせていただきました。

又、三陸の漁場で流れ残った網

の、その網のひもで婦人部の方々が手作りされた〝浜のミサンガ〟を、バザーの東北支援コーナーで販売して、皆さまのお気持ちをお届けしました。

バスの中から見た仮設住宅は、テレビでみていたものとは大きく違っていて、この夏の猛暑の中、知り合いもなく、頼りにしていた肉親とも遠く離れ離れになり、不自由な暮らしにじっと我慢でストレスのため体調を崩していらっしゃる方も多いとお聞きし心が痛みました。

建物などの復興は町ぐるみで、段々具体的になっているところもありますが、もっともっと大切な〝心のやすらぎ〟は?と思う時、今、声をおかけすることも出来ずにいる自分が情けなく、力のないことを感じ、只々、一日も早い〝心の平安〟を祈るばかりです。

本当に、小さいことばかりですが、私なりに〝長く長く忘れずに〟想いを寄せて行きたいと思っています。

「来ないとわからないよ」と言われて訪れた東北でしたが、幸い仙台にお友達が出来ました。その方の御世話で私でも出来ることが見つかりそうです。

東北から帰って3カ月が経ちました。今、私は、やっぱり行って来てよかった!と思っています。

## 被災地を訪問して

**片岡仁枝**

朝起きるといつも思います。身近な人を亡くされた人々の悲しみや喪失感はいかばかりかということを!　延々と続く原っぱのように見えるその地が、よく見れば何と、人々が平穏な生活を営んでいた家を全て奪い、地盤沈下のために水たまりが出来、新たに家を建てることも出来ない状況。

多くの児童を亡くされた大川小学校。学校の前にある小高い山は雪に覆われた急な坂道、小さな子供たちは登れません。屋上まで襲う津波になすすべもないその現場に立って声も出ません。

富士幼稚園では十二人の子供達を守れなかった園長先生を加えた十三のかわいいお地蔵様が肩を寄せ合う園庭。雨が降ればぬれてしまって可哀そう!と室内に入れてあげるそうです。何と悲しい光景、今も胸が締め付けられます。

高台にある磯山教会、襲いかかる大きな波から必死の思いで避難され、目の前で自宅が流されていったその様子を穏やかに話される、東北の方々の芯の強さに返す言葉もありませんでした。

ただ一本残ったあの一本松が、残念ながら、明日切られてしまうというその前日、私たちはその場に立ちました。海岸線を美しい松並木で人々をいやそうと、コツコツ植えて下さった数知れない松を根こそぎ奪ってしまった、津波の想像を超える破壊力。市庁舎の四階まで津波が襲い破壊されつくした現場。そこで働いていた母に「お母さん有難う、強く生きて行きます」と書かれた子供さんのメッセージに、どうかその子達をお守りください!と必死にお祈りいたしました。

仮設住宅に住む方々に、少しでも早く安心して暮らせる住まいが与えられますように。

そして被災された方々の事を決して忘れてはいけない、行ったものとして、皆さんに伝えていく使命を感じています。

## 気仙沼、陸前高田市をたずねて

**永田壽美子**

「津波で大きな被害を受けた宮城県石巻市の「石ノ森萬画館」が十一月十七日、一年八か月ぶりに再開された。」というニュースが聞こえてきた。画面には、最近私が見たまるい建物が映し出されていた。ふだんならば、見逃したであろうこのニュース、現地で実物を見たということだけで、脳のセンサーが反応したのだろう。

それにしても、ずいぶん早く再開したものだと思った。インターネットで調べてみると、この建物は「当初から津波を想定した建物だったため、魂とも言える原画が守られた。親子三代で楽しめる展示物ばかり」と管理運営をされている方が、来館を呼びかけているそうだ。やはり、他の建物とは違う構造でつくられていたのだ。

関西育ちの私は、東京より北へは、あまり行ったことがない。そのせいか地震の後、災害地へボランティアとして参加したい、何か送りたい、

何が手伝えるのだろうか、など考えては、私には出来ないだろうという答えになっていた。機会があれば、一度は現地を見たいという気持ちが膨らんできたときに、 二〇一二年九月、アンデレ教会から東北の被災地を視るツアーがあることを知り、ご一緒させていただいた。東北に詳しい笹森先生とごいっしょならば、どんな質問にでも答えていただけるし、何事においても大丈夫だろうと安心感があった。先生のご案内で気仙沼、陸前高田市をメインとして災害のあった場所を車でとおりながら、いろいろと説明をしていただいた。

最初に訪問先についての説明を受けたが、地震マップというものがあるということすら、私は知らなかった。水につかった場所が黄色い色で示されている地図をみて、仙台市でもこんなに広い場所が水につかったのかと驚かされた。仙台の若林区は被害がひどかったとテレビニュースで報道されていただろうが、ああそうなのか、住んでいた人たちは大変だったろうなと思う程度である。被災地に知人がいるといないでは、その後の物事のかかわり方にも差がでるのだということに初めて気がついた。もちろん、アンデレ教会でも東北の聖公会関係の建物の被害などは、聞かされているが、直接そこにいる人々と話したことがある、建物にはいったことがあるとでは助けようという気持ちのふくらみ方もちがうだろう。(もしかして、これは私が世情にうといということかもしれないが・・)

説明後、車で気仙沼まで移動した。リアス式海岸なので、海が見え、山影にはいり、また海が見えという状態でのドライブ。地震、津波以前の状態を知らない私にとっては、家がどのくらいたくさんあったのか、農作物の状態などわからない。一年半もたっていると雑草が生い茂り、一面青々としているので説明を受けない限りは、きれいな景色と思ってしまうが、車からおりてみると、家々の土台のみ残っているところ、満潮になると、土のなかから、じわじわと潮水がにじみ出てくる様子などで、ここで今も生活している方々の大変さが思いやられる。

陸前高田市の一本松も切り倒される前に見ることが出来た。この松を見ようとたくさんのかたが車で来ておられたが、何も考えずに旅行に参加した私にとっては、神様のお計らいでこの景色もみることができたのだと感謝している。水につかった建物のほとんどは、すでに撤去され、がれきの山や、車両が積み上げられている様子などから、水の力のすさまじさに唖然とするばかりだった。

なぜ、早くにげなかったのか?
なぜ津波がくるのに体育館などに避難していたのか?
義捐金はほんとうに被災された方々の役立つことに使われたのだろうか?
地震や津波がおわってからの苦言は幾らでも言えるが、もし自分が当事者となっていたならば、何をやっただろうか?・?・?

二日の間に見たこと、聞いたことによって、災害地への関心が深まり、地名をきくだけであのあたりだなと考えるようになれたことは、ほんとうによかった。

お世話になった方々に感謝、感謝。

## 【第六回ツアー】
## 十月九日～十日
## 十月の被災著訪問に参加して

高木日登美

東日本大震災から一年半、ずっと気にかけながら、日ごろの雑用に追われ、参加できずにいた被災地訪問。十月に再度訪問計画があると聞き、参加させていただいた。

まずは予定表を見てびっくり、新幹線、宿泊予定の大観荘等、とんだ〝大名旅行〟ではないか、『家をなくし、ご家族をもなくされた方々の訪問に、こんな豪華旅行でいいのかどうか。』正直、そんな思いを抱きながら、東京駅から新幹線に乗り込んだ。途中、笹森先生にお話してみると、「いいんですよ、今回は。一度きりで、もう行くのもうんざり、ということになってしまうと困りますから。」というご返事。確かに、納得のいくお答であった。

いっしょに歩こうプロジェクト事務局の仙台オフィスのスタッフの皆様、

そして笹森司祭(お父様)ご夫妻の暖かいお出迎えをうけ、被災の様子、実際の支援の様子などをうかがった。

笹森先生の運転で訪問した荒浜、松島、石巻、大川小学校、どこもテレビの映像で何度も見た場所ではあったが、実際に見て音を聞きにおいを感ずることにより、一年半を経た今も、その悲惨さが伝わってきた。復興が進む陰で、そのまま残されているもの、災害の大きさをより深く物語っていた。

石巻の門脇小学校の屋上に掲げられた、『ゆたかに育てこころとからだ』、大川小学校の石壁に描かれた絵の中にある『未来を拓け』どれもが希望のある言葉、ご家族、特に小さいお子様をなくされた方の悲しみは計り知れないと感じずにはいられなかった。

震災後から長いこと被災者に寄り添ってくださっている事務局の方々、「子供たちをディズニーランドに連れて行ってあげたかったけどできないので、夏休みは室根にローネンランドを造って、子供たちに好評だった。でも、僕が遊んでもらっているんです。」と話していたスタッフの一人しょうた君、皆様のお働きに感謝。特に事務局長の松村豊さん、東京で留守宅をしっかり守っていらっしゃる信子さんにも感謝。

最後に、笹森先生をはじめ、旅館のご手配等ツアーコンダクターをしてくださった三好さんご夫妻、佐藤睦さん、小泉妙さん、楽しい旅行でした。ありがとうございました。さて、再び足を運びたいと思っています。家族、友人と共に。

一日も早い復興を願って。

## 被災地を訪問して

アンデレ　佐藤　睦

机の上の被災地の写真を見ています。東北を襲った地震と津波による被害を受けたほんの一部の写真です。テレビ、新聞で見た被害の恐ろしさ。それを実際に目の当たりに見たあの時。私たち六人の後姿が茫然としている様子がよくわかります。破壊された瓦礫しかない町はなんと悲しい空間なのか。ことに、石巻の大川小学校の石碑(小学生、職員の方々八十人以上が亡くなったそうです)の前では只々頭を垂れて祈るだけでした。

十月九日から一泊の短い被災地訪問でした。総勢六人。九日十一時過ぎ支援センターともいうべき仙台オフィスに到着。七〜八人位のスタッフの皆さんが白板を使って、支援の行動管理をしていました。京都からきて応援をしている人もいました。レンタカーで若林区荒浜、仙台港、多賀城、松島へ向かう。車中から見る様子ではだいぶ片付けられていたが、瓦礫の山だったり、補修中だったりしていましたが、人が住んでいそうもないところが散見されました。松島には瑞巌寺があります。ガイドを頼んで案内してもらいました。震災時の様子を詳しく話してくれました。やはり水が相当奥まで襲ってきたそうです。しかし、日頃避難訓練をよくやっていたせいか、人的被害はなかったそうです。勿論木々が倒れたり、泥が押し寄せたりで後片付けに大変苦労したとのことでした。

翌日は石巻の市内を見て回りました。石ノ森章太郎の石ノ森記念館があるところは、地盤沈下で水位がだいぶ上がり、建物の直ぐそばまで来ているので、これからどうするのかなと心配です。昼食後あの大川小学校に行きました。無残な姿で残された校舎があります。何時までも記憶に残るでしょう。仙台駅で一生懸命土産を買いましたが、少しはあの地の役に立ったのでしょうか。とにかく何時までもこの震災のことを忘れずに祈り続けたいです。

## 買って支援を

小泉　妙

十月九日、笹森先生のご案内で、佐藤睦さん、三好ご夫妻、高木日登美さんと共に、仙台へ参りました。

到着して先ず、「いっしょに歩こうプロジェクト」の事務所へ。松村豊さんと他の教会の方々のお話を伺いました。震災から一年半過ぎた現在、此の地の人々が他に望むのは、災害を忘れず観光に来て産物を買うということも、支援の一つ

の形なのだそうです。罹災者との関係は馴れて、よくなったとは云え、なかなか難しいようで、困難なお仕事には、ただ感謝のほかございません。

笹森先生は仙台でお育ちになっただけに、レンタカーを運転なさりつつ、見るべきものを落とさず教えて下さいました。「これは元の道」「此処は自衛隊の造った道」。広場が続くと思っていると其処は「街だった」のです。猫じゃらしや小さな草の命が生きて育ち、風にゆれているのが悲しみをそそります。

石巻に向かう途中の荒浜で、先生は夏休みに泳がれたそうです。湘南と違い水が冷たいので泳ぎの期間は短い。伺いつつ眺める海の色は暗く、かけがえのない命も家も何もかも浚い去った凄みを感じました。

石巻の大川小学校では、七十四名の児童が亡くなりました。教室から外へ避難のつもりで出て、津波にさらわれました。すぐ近くに登れる山があるだけに、遺族の嘆きの深さが察せられます。無残な姿で残る校舎は、ありきたりの小学校の建物とは違い、なにか教育の理想があって建てられたのではないでしょうか。九月十日、月命日の前日、供養の石碑に沢山の美しい花が供えられて居りました。

松島のホテル大観荘は立派で、被災地見学の旅にしては気がとがめますが、観光も支援となるという点で納得致しました。

市場でわか芽と茸。駅で蒲鉾とタンシチューを買いました。シチューが大層美味しく、先日バザーで出たチャウダーと共に、非常用にもなりますし、近づくクリスマスのプレゼントにもお買いになることをおすすめ致します。

## 被災地見学ツアーに参加して

鈴木 茂

二〇一二年三月十一日東日本を襲った大地震、私達が経験したことのない大災害から一年半が過ぎました。一五、八七九名の死者、未だにに確認できない行方不明者、二、七一二名、全壊一二九、七二四戸、半壊二六七、六六六戸、一部損壊を合わせると七六一、六八〇戸が被災しました。

この数を見ても、実感が湧かないと思います。茨城県から青森県の太平洋側の全ての市町村が被災しました。殊に福島県・宮城県・岩手県の海岸の市町村は、津波によって壊滅的な打撃をうけました。

この事は皆さんが知っているとおもいますが、時がたつと、あの衝撃的な記憶さえ、薄らいでいきます。

私達が被災地を訪ねた時、瓦礫はほぼ、撤去され、津波によって壊された多くの建物が、解体され、かって其処に家があったであろうと思われるコンクリートの基礎だけが残っていました、そして海の方に目をやると、其処にあったであろう防波堤、港湾施設、橋などが無くなり、剥き出しの穏やかな海が観えました。私はどうしようもない、怒りと、悲しさと、寂しさを感じ、其処に居る事さえが、苦痛に感じるほどでした。

私達の住む東京では時々、復興の明るい話題がニュースになりますが被災地に行くと、そのニュースが虚しく思われてきます。私には、瓦礫の撤去が終わっただけにしか思えないのです。あれから、二度目のクリスマスが過ぎましたが、今なお三万五千戸以上の仮設住宅に避難されている方達も含め、三十二万人の避難者が、生まれ育った故郷に帰れず、不便な、生活を余儀なくされています。私達が見てきた場所に、かってのような生活が戻ってくることは、大変難しいと、思います。

私達に今できること、それは、この目で観て来た事を一人でも多くの人に、伝える事だと思います。被災地に笑顔が戻ってくるのは、容易ではないでしょう。被災地の方達の願は、被災地を忘れないと云うこと思います。一人でも、多くの方が、被災地に行って欲しいと私は、願っています。

【青年大会参加者】

## 二〇一二年八月
## 日本聖公会全国青年大会

**エリヤ　沼原　類**

私は八月二十三日二十六日の間、開催された全国青年大会に参加しました。今回の青年大会のテーマは『re:member ～ひかりを灯そう～』です。三月十一日に起こった東日本大震災を風化させない、〝覚え続ける〟という意味から remember と名付けられました。また、この被災地で「もう一度(re)聖公会の青年達(member)が集まり、皆で一つのひかりを灯そう」という想いも込められています。全国各地から東北に約七十名の青年達が集まり、被災された地域を見て感じたことを、考え、話し合い、分かち合うことを目的としたものでした。

大会の三日目、被災地の中でもテレビではなかなか報道されない新地町を訪れました。新地町に到着し、バスを降りると見えたのは辺り一面に広がる草原の景色でした。近くの海から聞こえる波と風の音しか聴こえてこない広くて静かな場所です。しかし、よく見渡すとこの一年半で伸びた雑草で隠れてしまった建物の基礎部分がありました。被災地のガイドをしてくださった三宅信一さんの話によると、震災前は街があり、人が住む家や、車の通る道路があったというのです。海側から砂浜、堤防、田んぼ、墓地と並んでいたという場所は跡形もなくなり、海水が溜まってできた大きな池のようになっていました。「ここはあの木よりも高い十五mの津波が来たんだ。」と背の高い木を指して三宅さんは教えてくれました。

全く想像することができませんでした。人や車が行き交い賑やかだったであろう震災前や、津波に襲われた震災当時。正直、その時見た場所からは「街」も「津波」も想像がつきませんでした。被災された地域を訪れた人からは「わからなかったということがわかった。」と話には聞いていましたが、その通りでした。このような自然による大災害に見舞われた地域が他にもたくさんあるというのに、どう復興できるというのか。見当もつきませんでした。

こういった土地の被害、人々の生活などの様々な問題を改善するにはやるべきこと、必要なものがたくさんあります。それは私たちに少しでも力になりたいという気持ちがあれば、できることがなにかあるはずです。例えば、ボランティアなどの支援活動。また、東北へ行き、お金を使うという方法もあります。しかし、こちらが助ける側ではなく、東北の人達と〝一緒に歩く〟。「被災地」と呼び、そこの地域だけを区別するのではなく、同じ日本に住む人間として共に支え合うことが大切だと思います。そして一番念頭に置いて考えるべきことは、被災された方々、土地には今なにが必要かということ。食料や物資が足りなかった震災直後とは全く状況が変わったこともふまえ、本質的に今必要なことを見極めなければならないと感じました。

四日間を通して、実際に被災された方々、支援活動を行う方々の話を聞き、また、「震災」という一つの大きなテーマについて全国の様々な地域、価値観の青年達や大人達と共に考え、話し合う貴重な経験ができました。正直な話、この一年半、「なにか動かなければ。」とは思っても実際に行動に移すことはしませんでした。そういう後ろめたさのようなものを感じながらの参加でした。自分の中でも震災に対する気持ちが徐々に薄れてしまっていたのだと思います。しかし、この青年大会に参加したことで多くのことに気づかされ、震災のことを改めて深く考えることができました。

大切なのは〝忘れない〟ことだと思います。東北に行き、考え、話し合いました。そして、次は伝えることで、自分だけではなく周りの人が少しでもこの震災に触れることができれば、また次に繋がるはずです。震災のことを風化させないためにも、一人一人がこの悲惨な出来事、多くの問題が山積みになっている現状を考え続けることが必要なのではないでしょうか。

自分は実際に被災していないので、そういった方々の辛い気持ちや苦し

みを本当の意味で理解することができませんが、東北の人達が今より少しでも楽に、安心して日々の生活を送ることができるよう、祈ります。

今回の全国青年大会への参加を支援してくださった皆様に心から感謝を申し上げます。

## 青年大会に参加して

鈴木　みのり

私が、青年大会に参加しようと思ったそもそもの理由は、今年二月の第一回U26全国集会で、出会った仲間たちが、また集まれる良い機会だと思ったからです。

青年大会がいかなる主旨のもと、なにを行う場であるのかはあまり理解していませんでしたが、半年振りに会う仲間、そして新しく出会う人達との交流を楽しみにしながら臨みました。今回の青年大会は「re：member」というスローガンを掲げ、東日本大震災を忘れない為に震災をテーマにして全てのプログラムを行いました。放射能被害や風評被害の現地の肩の生の声で聞くことは、やはりテレビや新聞などのメディアから知る情報以上に、ためになりました。

震災に基づく幾つかのプログラムの中で、一番心に残っているのは、被災地見学です。実際に現地に足を運んで津波に流された町を見るのは、今回が初めてでした。この一年半の間、自分の目で被災地を見たとき、一体何を感じるのかと思っていましたが、素直な感想を述べるなら何も解りませんでした。

被災地と呼ばれ案内された場所は、何もない静かな草原でした。私の中で、津波の被害に遭った場所は、手のつけようも無い程、建物の瓦礫で埋め尽くされた光景のまま止まっていたので、初めて映像で見た津波の被害を見た時とは、また違った衝撃をこの時受けました。それと同時に「震災が忘れられてしまう」という言葉の意味をようやく理解できました。

きっとこの先も東日本の被災地は、様々な人が様々な目的で足を運ぶと思います。その都度にきっと、何も無い草原に残った土台や鉄筋の建物を見て様々な事を感じると思います。

しかしそれは結局震災のほんの表面を見ただけに過ぎず、震災を理解したとは到底いえません。これから私達が被災地・被災者の方達の為に本当に行わければならない事は本当の意味で、より深く震災を理解する事だと思いました。

そして、一番危険なのは、解った気になってしまう事、解ろうとし無くなる事です。そうなってしまった時がきっと「震災が忘れられてしまう」事だと思います。